

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◇◆◇ No.0625 ◇◆◇

21/03/03

【「一年で一番動く3月相場」だが、果たして今年は!?】

過去の経験則からすると、「動くか動かないか両極端になりやすい」—2月相場が先日修了したものの、今年の後者、「動かない—ヵ月」だった。その変動はというと、月間を通してわずか2.27円。1月よりも変動幅は縮小している。

そんな2月相場を受けた足もと3月相場だが、平均すると「一年間で一番大きく動く月」とも言えることで、いい加減「今度こそ!」といった巻き返しの動きを期待したい。そろそろオオカミ少年化しているところが気になるのだが、本当の意味で正念場を迎えていることは間違いないだろう。

◎昨年3月は「新型コロナ」の影響で為替・米株大荒れ、今年も要注意!?

3月相場の特徴などを考える前段階として、まずは1990年以降昨年まで過去31年間の「勝敗」を最初に振り返っておくと、15勝16敗でほぼ互角だった。一般的には、「3月決算期末に向けたリパトリエーション」など幾つかの需給要因・決算対策もあり円高有利との指摘も聞かれたが、データの的にはまったくドル安・円高が有利とも言えない状況であるようだ。

しかし、3月相場には別に大きな特徴があり、それが「方向性を別にして平均すると、年間を通してもっとも値動きのある月」であるということになる。とくに2000年以降、近年にその傾向が強い。

実際、喫緊の事例をひとつだけ挙げると、2011年が月間変動幅7.05円で同変動率1位、昨2020年もやや変則的な「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの急落が観測されたことは記憶に新しいところ。月間変動幅は実に10.52円、同1位を記録している。また、過去21年の3月の平均ドル/円変動幅はおよそ5.7円で、これは年間を通じた第1位となるなど、「今度こそは」と筆者ならずとも捲土重来を期待している向きが多いことは間違いない。

ただし、以前にもレポートしたことがあるが、ここ数年、具体的に言えば2017年以降のドル/円相場は1-4月の4ヵ月で「年間変動の大半を記録」し、あとの8ヵ月は「ほぼオマケ」といった様相を呈することが少なくない。たとえば、昨年はその典型例であるのだが、ドルの年間最高値は2月に記録した112.23円、対するドルの年間安値は3月に示現した101.19円。したがって、4月以降は101.19-112.23円のレンジ内で一進一退を繰り返したに過ぎなかったわけだ。

とするなら今年も足もとの3月と来4月、そのどちらかにドル/円は大きな動意を見せないとまさに危機的状態と言えるだろう。そうした意味からも、今月の価格変動は非常に重要と指摘しておきたい。

一方、過去の3月を歴史的な面で見ると、興味深い事象が2つ浮かがる。

ひとつは、先にも記したように、日本企業の多くが決算期末にあたるものが影響しているのか、「企業破綻」や「損失公表」といったニュースが多くみられること。そしてもうひとつは、「為替や金融市場に関する、歴史トピックスも少なくない」ことだろう。

後者についてのみ典型事例を示せば、やはり1933年のルーズベルト大統領による「ニューディール政策」発表だろうが、ほかにも1ドル=360円の固定相場制導入を決定した1949年の「ドッジライン」発表、1953年の日本株大暴落(通称「スターリン暴落」)などのほか、もう少し具体的なマーケット寄りの事象として、「NYダウが初めて1万ドル突破(1999年)」、「ドル/円が1995年に記録した戦後最安値を更新(2011年) *注:安値を更新しただけで、大底75.57円示現は同年10月*」—などがすべて3月中に起こっている。また、下落率が20%を超えた1987年の「ブラックマンデー」には及ばなかったが、それでもNYダウの一日の下げ幅が12%強。過去2番目の下げ率を記録したのは昨年の3月16日で、また同12日も下げ幅10.0%を記録し、こちらは歴代5位の記録となるなど、2020年の3月相場は連日のように米株をめぐる様々な記録ラッシュに沸いたことはいまでも鮮明に覚えており忘れられない。

もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるわけではない。しかし、NYダウが先週末にかけての2日間で1000ドル以上下落したのち、わずか一日で600ドルも反発するなど動静が不安定。また、暗号資産(仮想通貨)

通貨)ビットコインもここ最近連日のように荒い値動きをたどっていることは周知のことだ。
各国でワクチン接種が進んでいることもあり、感染拡大はやや落ち着いているものの、引き続きコロナ禍という環境にあるなか、米株やビットコインを中心に、今年の金融市場はなにがあってもおかしくないという姿勢で臨んだ方が間違いないようにも思っている。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



FX-newsletter